

地域集団スポーツにおける社会関係の形成、継続・発展の規定要因

— 神奈川県旧・津久井郡城山町における軟式野球を事例として —

田中 恵

キーワード：社会関係、仲間関係、友人関係、地域集団スポーツ、軟式野球

1. はじめに

地域スポーツはすべて、その地域の住民によって行なわれ、そしてそれは彼ら自身の利益に資するように行なわれるものである。その場合、住民のほとんど大部分は「頂点スポーツ（チャンピオンシップ・スポーツ）」¹ではなく、「幅広スポーツ（裾野スポーツ）」を行なうことになる。 「幅広スポーツ」とは、スポーツ・フォア・オール、すなわち「一般の市民すべてが、スポーツに親しみ、生涯を通じて自分にあったスポーツを楽しむ、という社会的目標」²に向けてのスポーツを意味する。こうしたスポーツへの期待・要求には、「レジャーにおける楽しみ」「健康の維持・増進」「社交」「自己実現や可能性の追求」³などがあるとされる。また、スポーツの舞台が地域社会であるならば、「多様な社会的構成を持った地域社会の中で展開することによって、自己実現のよろこび、人間関係の発展、社会的規範の学習など、身体的発達以外の豊かな社会的効果をも生むことになる」⁴とされる。これらすべてを実現する可能性をより多く有しているのは、特に「人間関係の発展」を含めてということになると、個人単独で行なう種目より、他者との交流を前提条件とする集団スポーツの各種目であろう。

そうした集団スポーツの一つとして軟式野球がある。軟式野球は比較的古くから全国各地域で行なわれてきた。しかし、以前の軟式野球は、その参加者のほとんどが二、三十歳代の男性によって占められており、地域社会全体からみれば一部住民だけのスポーツという印象があり、まして、地域内の多くの住民同士の交流が促進されたり親密な紐帯が結ばれたりすることは少なかったように見える。すなわち、軟式野球を通じての住民個々人の社会関係の形成、特に友人関係の形成は限定的であったと考えられる。しかし、昨今の軟式野球においては、その参加者はより多様な年齢層からなっていて、四、五十歳代は言う

に及ばず、六、七十歳代の住民が監督や審判員としてだけでなく選手として元気にプレイしている情景が見られる。したがって、以前より多くの社会関係の広がりが見られるのではないかと予測される。

ここで、社会関係とは、個人とその周囲の他者たちとの関係を意味するものであり⁵、軟式野球を通じて結ばれる社会関係は、第一義的には、チームメイトとの関係が想起されるであろう。とはいえ、チームメイトとの関係がそのまま親密な紐帯を意味するものではないし、そこから発展して自動的に仲間関係や友人関係を結ぶに至るわけでもない。しかしながら、それでも、この社会関係は、集団の目標をメンバーみんなが共有し、それを実現するために協力・協同する経験を積み重ねることによって、親しい間柄に発展する可能性が高いのではないかと考えられよう。他にも、軟式野球を通じて結ばれる社会関係は、他のチームの選手や審判員との関係、あるいは、競技団体役員などとの関係が想起され、その場合、個人は集団外部の他者と交流、交際することによって、その社会関係をより広げることが可能となろう。

数ある地域スポーツの中でも多くの地域社会において親しまれてきた歴史を持ち、そして今なお、従前ほどではないにしろ根強い人気を保ち活発に行なわれている軟式野球について、本研究では、特に、その参加者の社会関係の形成、継続・発展の過程、および、それを規定する要因を詳細な事例分析によって明らかにすることを目的としている。

2. 研究の視角と調査方法

軟式野球は、アメリカ合衆国から持ち込まれた硬式野球を改良したものである。その硬式野球は、『明治野球史』によれば、まず旧制一高や早稲田、慶応などの学校間対抗試合が行われ⁶、その後、野球チームをもつ学校や企業が増えていくという経過を辿って本格的な普及へと進んでいった。一方、軟式野球は、その創設期の歴史に詳しい『軟式野球史』によれば、次のような経緯で始まったという⁷。野球は、上記の学校間対抗試合に憧れた子供たちのボール遊びのような形で広がりを見せていた。明治末期（1910年前後）のことで推測されている。子供たちは「街の空き地や原っぱ」で三角ベースなど野球のまねごとから始めたとされる。当初から、子供たちが本格的なスポーツとしての野球に取り組めなかったのは、一つには野球道具が高価で子供たちの遊び道具としては手を出せなかったという事情があった。それでも、子供たちの野球への関心は衰えることがなかった。やがて小学校の校庭でも野球は行われるようになり、それはもはやボール遊びの段階ではなくなっていた。しかし、硬式野球のボールを使うには至らず、少年たちは代用のボールを使い続けていた。代用ボールは耐久性や安定性に難点があり改良の必要があった。大正中頃

(1920年前後)になると、そのような状況を見て、京都の学校教師などの有志から成る京都少年野球研究会が少年野球用ゴムボールを考案し、さらに改良が加えられて軟式野球用ボールが完成、普及していった。以上、『軟式野球史』をもとに、軟式野球が始められた経緯を簡潔に述べてきた。こうして、日本独自の軟式野球というスポーツが成立し、アメリカから入ってきた硬式野球とともに2種類の野球が並存し行われることになったのである。

軟式野球は、少年のためだけのスポーツでなく、その後、大人のスポーツとしても盛んに行なわれるようになったが、それは学校を卒業しても野球を続けたい青年たちが少なくなかったからと推測される。しかし、野球をやるためにはチームが必要である。それも学生生活を終えた社会人男性にとっては、平日は仕事があるため、休日や早朝に行なうことになるので、やはり身近な舞台でやるのが都合なのであろう。そうすると必然的に、その活動舞台は地域か職場に限られてくることになった。それらのうち、地域で行なわれる軟式野球の主体はそこに暮らす住民であるが、他の地域に住みながらも当該地域で働く従業員たちもそれに参加していた。野球チームとしては、地域住民を主体とする「地域クラブ型」チームと、事業所の従業員によって構成される「企業型」チームという2つの異なる性質の野球チームが混在することになった。「企業型」チームの場合、その参加者は、基本的にはすべてその事業所の従業員なので、彼らが互いにとり結ぶ社会関係は職場関係である。その職場関係は、同僚による対等な関係もあれば、上司と部下の関係や、職位は同じでも勤続年数の違いによる先輩・後輩関係のような垂直的な関係もあり、一様ではない。しかしながら、いずれにせよ、地域社会に固有の社会関係ではない。したがって、本研究では、「企業型」チームの活動の重要性に留意しながらも、主として「地域クラブ型」チームとそのメンバーを分析対象とした。また、「企業型」チームが多い都心地域や工業都市ではなく、郊外住宅地の中から分析対象地を選択した。本研究の対象地域である神奈川県相模原市城山町（旧津久井郡城山町）もそうした地域の一つである。

もう一つ軟式野球の発展に影響を与えたことは、軟式野球の地域競技団体が地域住民によって組織化されたことである。その空間範囲は概ね郡市区町村であり⁸、郡市区町村ごとに、たとえば、「城山町軟式野球協会」とか「津久井郡軟式野球連盟」等と称して設立されている。これらの組織は、当該地域において毎年定期的にトーナメント大会やリーグ戦を主催し、そのためにグラウンドを確保し、審判員を派遣する。それによって、参加チームは自らグラウンドや試合相手を探す負担を減らすことが可能になったのである。各チームから派遣された代表者はこの競技団体を運営していく役員となるのであるが、そこでは他の役員と協力・協働してさまざまな運営活動に携わるのである。こうした活動も地域スポーツとしての軟式野球への参加の仕方の一つといえるであろう。

さて、社会関係の中で、友人関係は、親密な他者との関係であり、出会いの社会的文脈

から離れても、「それ自体として親密な関係を維持している場合を指す」⁹ものとされる。Allan.G.によれば、この「友人」という他者と似た性質をもつが区別される語として「同輩 (pal)」「仲間 (mate)」「あいつ (mucker)」「相棒 (buddy)」があり、「友人 (friend)」といういい方では何らかの理由でぴったりこないような関係を、より適切に表現するのに使われたりする」と指摘している¹⁰。その中でも仲間との関係は、社会的文脈に限定されるかどうかで友人関係と区別されるといふ¹¹。仲間関係は、特定の場面でのみつきあう他者との関係であり、他の場面にまで及ぶことはない。たとえば、職場で知り合って親密になった他者は仲間であるが、その他者との交流が職場だけに限定されるならばそれは仲間なのである。それに対して、職場以外にも親交が広がるならば、その他者は友人ということになる。ただし、仲間関係は友人関係に比べて「緊密度の低い友情、もしくは萌芽的にすぎぬ」¹²ということではない。両者の違いは、あくまでも、社会的文脈に限定されるか、されないかということである。

よって、本研究においては、親密な他者との関係が野球という社会的文脈、すなわち、試合や練習、そしてその後に開かれる飲み会や食事会、および、クラブの公式行事としての忘年会などでの交流に限定されているならば、仲間関係とし、こうした野球という社会的文脈に限定されない交流があって親密な関係を構築しているならば、友人関係と見なすことにする。そして、個人が軟式野球に参加する他者との最初のかかわり方によって次の3つに類別する。第1に、既存のチームに個人が新規に加入するケースで、その個人はチームのメンバーと「チームメイト」という同僚関係を結ぶことになる。第2に、他者と共に新しくチームを創設するケースで、他のメンバーの全部または一部とすでに何らかの社会関係を結んでいることが多い。そのうえで、「チームメイト」という同僚関係を結ぶことになる。これらはいずれもチーム内の社会関係であるが、地域スポーツとしての軟式野球では、チーム外の他者と社会関係をとり結ぶケースもまた可能である。それは、チームを代表して競技団体の一員となり他チームの代表者と交流するケースが考えられるので、このケースについても検討を行なう。

次いで、それぞれに成立した関係の継続・発展の過程を検討する。より具体的にいえば、それらの社会関係の継続・発展が、「チームメイト」としての関係のまま維持されているのか、あるいは、仲間関係か友人関係へと展開していくのかに分けて検討を行なうこととした。

調査は、2004年7月から2007年11月まで、神奈川県旧・津久井郡城山町（現・相模原市城山町）において年2度のトーナメント大会が行なわれた日曜日、試合会場を訪れて、当時参加していたチームの代表者や城山町野球協会の役員などにインタビューを実施したほか、同協会が保管していた規約やトーナメント大会組み合わせ表、理事会・総会資料などの文書を参考にした。また、城山町野球協会が所属していた津久井郡野球連盟の役員へ

のインタビューを行ない、作成・保管されている文書を参考資料とした。なお、年度によっては協会に文書が残っていないこともあるので、チーム数、チーム型の内訳、登録選手数、選手平均年齢が明示することが不可能な年度もある。

3. 城山町の社会構造と軟式野球の地域スポーツとしての発展過程

神奈川県相模原市城山町は、同県津久井郡に属する人口2万3千人余の1町だったが(表1)、神奈川県唯一の「平成の大合併」によって、同郡の他の3町と共に、2007年3月(津久井町・相模湖町は2006年3月、藤野町は2007年3月)、相模原市に編入合併した。同県北西部にあって、東京都千代田・中央・港の都心3区を中心業務地区(CBD: Central Business District)とする「東京圏」¹³においてはその中心から40～50kmの距離に位置す

表1 城山町人口推移 1955 - 2005年

	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005
人口総数	4932	5280	7329	8141	10721	15732	19248	21535	22732	23036	23067
15歳未満	1644 (33.3%)	1696 (32.1%)	2048 (27.9%)	2239 (27.5%)	3142 (29.3%)	4845 (30.8%)	5353 (27.8%)	4378 (20.3%)	3594 (15.8%)	3193 (13.9%)	3176 (13.8%)
15-64歳	2953 (59.9%)	3227 (61.1%)	4858 (66.3%)	5396 (66.3%)	6969 (65.0%)	10051 (63.9%)	12731 (66.1%)	15610 (72.5%)	17077 (75.1%)	17160 (74.5%)	16230 (70.4%)
65歳以上	335 (6.8%)	357 (6.8%)	423 (5.8%)	506 (6.2%)	610 (5.7%)	835 (5.3%)	1163 (6.0%)	1534 (7.1%)	2061 (9.1%)	2683 (11.6%)	3544 (15.4%)
人口密度	253.6	271.2	376.4	418.1	561.0	823.2	1007.2	1082.2	1142.3	1157.6	1159.1

*資料出所：国勢調査各年

る。その都市としての発展は主に、東京圏の、特に戦後の人口増加と住宅需要の拡大によって、新たな郊外住宅地になったためであり、それは1970年代後半に本格化したものである。

それ以前の城山町は、東京圏周縁部の一角に位置する農村地域の一つに過ぎなかった。1955年、いわゆる「昭和の大合併」の中で川尻村、湘南村、および三沢村の一部が合併して町制が施行されたことで一つの行政単位となりスタートしたが、当時の人口は5千人にも満たなかった(表1)。主要な産業としては、製造業は少なく、農業、特にその中でも養蚕業が目立つぐらいであった。産業別就業者比率を見ると(表2)、農林漁業従事者が55.5%と圧倒的に高く、次に多いサービス業従事者の15.0%の4倍近くも占めていた。また、その後上昇することになる建設業(3.9%)、製造業(5.7%)はともにまだ低く、むしろ神奈川県の水場や発電所があったことから、電気・ガス・熱供給・水道業従事者の比率(7.6%)

の方が高いぐらいであった。そして、これらの公共機関の従業者が野球チームを作って町の野球協会に登録し公式試合に参加していた時期が数年あった¹⁴。

そんな城山町ではあったが、野球は数少ない娯楽としてすでに町在住の青少年層に受け入れられていた。当時の様子を記録した文書は残っていないが、戦前から同地域に居住し現在も同町で野球を楽しんでいる人々の話によると、町民のための野球専用グラウンドはなかったので、試合は小学校のグラウンドで行っていたという。チーム数は5ないし6と少なく、中にはユニフォームが揃わないチームもあったとされる。

昭和30年代、高度経済成長期が始まると、その牽引車の役割を担った製造業への就業者が城山町でも急増し、就業者総数（産業別）に占める製造業就業者比率は1955（昭和30）

表2 城山町産業別就業者数推移 1955 - 2005年

	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005
農林漁業	1203 (55.5%)	884 (38.4%)	695 (20.1%)	582 (15.3%)	334 (7.3%)	289 (4.4%)	233 (2.7%)	193 (1.9%)	203 (1.7%)	189 (1.6%)	129 (1.1%)
鉱業	25 (1.2%)	73 (3.2%)	34 (1.0%)	51 (1.3%)	22 (0.5%)	14 (0.2%)	20 (0.2%)	9 (0.1%)	25 (0.2%)	13 (0.1%)	5 (0.0%)
建設業	85 (3.9%)	136 (5.9%)	956 (27.6%)	432 (11.3%)	595 (13.0%)	783 (11.8%)	843 (9.9%)	1048 (10.1%)	1239 (10.6%)	1194 (10.2%)	1095 (9.6%)
製造業	123 (5.7%)	397 (17.3%)	752 (21.7%)	1264 (33.2%)	1510 (33.1%)	2128 (32.2%)	2927 (34.3%)	3301 (31.8%)	3218 (27.6%)	2602 (22.2%)	2282 (20.0%)
電気・ガス・熱供給・水道業	165 (7.6%)	94 (4.1%)	99 (2.9%)	123 (3.2%)	118 (2.6%)	148 (2.2%)	166 (1.9%)	171 (1.6%)	148 (1.3%)	126 (1.1%)	72 (0.6%)
運輸・通信業		109 (4.7%)	149 (4.3%)	199 (5.2%)	238 (5.2%)	374 (5.7%)	429 (5.0%)	589 (5.7%)	662 (5.7%)	789 (6.7%)	911 (8.0%)
卸売・小売業、飲食店	168 (7.8%)	194 (8.4%)	314 (9.1%)	461 (12.1%)	685 (15.0%)	1069 (16.2%)	1436 (16.8%)	1805 (17.4%)	2227 (19.1%)	2470 (21.1%)	2453 (21.5%)
金融・保険業	10 (0.5%)	16 (0.7%)	42 (1.2%)	40 (1.0%)	74 (1.6%)	124 (1.9%)	155 (1.8%)	234 (2.3%)	292 (2.5%)	293 (2.5%)	192 (1.7%)
不動産業				28 (0.7%)	41 (0.9%)	61 (0.9%)	69 (0.8%)	123 (1.2%)	141 (1.2%)	121 (1.0%)	155 (1.4%)
サービス業	325 (15.0%)	298 (13.0%)	309 (8.9%)	472 (12.4%)	735 (16.1%)	1260 (19.0%)	1839 (21.6%)	2386 (23.0%)	3011 (25.8%)	3406 (29.1%)	3373 (29.6%)
公務	62 (2.9%)	99 (4.3%)	107 (3.1%)	157 (4.1%)	202 (4.4%)	364 (5.5%)	412 (4.8%)	441 (4.3%)	507 (4.3%)	503 (4.3%)	488 (4.3%)
分類不能の産業	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (0.0%)	3 (0.1%)	11 (0.2%)	1 (0.0%)	0 (0.0%)	68 (0.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	231 (2.0%)
総数	963	1416	2763	3230	4231	6326	8296	10175	11470	11517	11257

* 資料出所：国勢調査各年

年の5.7%から、1960年17.3%、1965年21.7%へと高まっていった（表2）。ただ、これは城山町内よりむしろ相模原市など周辺の工業都市での就業が多かったためであり、城山町における製造業事業所の立地開設が増加したからではなかった。製造業事業所は「企業型」チームの母体となって、操業地域の軟式野球にも参加することが多かったので、城山町において（表3）、製造業事業所が昭和35（1960）年5、同38（63）年9と少なかったこと

は、城山町におけるチーム数の多寡に影響を及ぼしたかもしれない。他方、「地域クラブ型」チームがいくつか結成され活動を始めていた。近隣関係を基盤としてチームをつくり地域の名称からそのままチーム名にするチームもあれば、メンバーの一人がスポンサーとなってチームの運営資金の一部を出す代わりに経営する商店や作業所の名称をチームの冠名にするチームもあった。後者のチームのうち2つはその後、2008年の今日もなお存続している（次節・事例1を参照）。

また、農林漁業従事者は就業者総数に占める比率が上記の製造業とは対照的に1960年の38.4%、65年20.1%へと急激に低下していき（表2）、城山町は1960年代を通じてその農村的性格を急速に失っていった。

製造業と共にこの時期、就業者総数に占める比率を高めたのが建設業従事者である（表2）。

表3 城山町産業別事業所数推移 1960 - 2001年

	総数	農林 漁業	鉱業	建設業	製造業	電気・ガス・ 熱供給・ 水道業	運輸・ 通信業	卸売業・ 小売業・ 飲食店	金融・ 保険業	不動 産業	サービ ス業	公務 (他に分類さ れないもの)
1960年	130		1	11	5	3	2	72	1	0	35	
1963年	175		3	25	9	1	3	93	1	2	38	
1966年	198		6	30	19	5	3	89	0	6	40	
1969年	243	5	4	31	29	4	3	115	1	7	44	
1972年	298	6	4	49	36	6	4	130	2	10	47	4
1975年	346	5	1	68	36	5	7	143	2	12	63	4
1978年	425	4	3	79	35	5	7	163	2	35	86	6
1981年	634	5	4	109	56	5	12	221	5	52	160	5
1986年	711	6	5	127	65	5	15	223	5	59	196	5
1991年	755	6	3	143	68	7	22	227	9	59	206	5
1996年	746	7	1	138	50	8	17	240	6	61	212	6
2001年	730	8	-	126	44	6	20	249	5	56	208	8

*資料出所：事業所統計各年

1960年の5.9%から65年の27.6%へと4倍以上高まった。これは1965年に完成した城山湖と本沢ダムの建設のための労働者が城山町に多数移住したことがその要因である。しかし、工事の終了によって大部分は再び去っていったので、上記の比率は70年には3分の1近くの11.3%へと低下した。

1960年代には、城山町の軟式野球にとって大きな出来事があった。それは、1964年、城山町野球協会が設立されたことである¹⁵。同町の種目別競技団体はその後17設立されることになるが、その中で最初に設立されたのが野球協会であった。城山町野球協会は、2007年末、城山町の相模原市への合併にともなって解散するまで40年以上にわたって、同町唯一の成人向け軟式野球の競技団体として活動を続け、チーム間の調整や、大会の開催など

の役割を果たした。しかし、競技団体が設立されたとはいえ、城山町にはまだ町民が安価で利用できる野球専用のグラウンドはなかったので、町唯一の中学校のグラウンドを学校行事のない日曜日に借りて使用していた。

大規模な建設事業とそれに伴う建設業従事者の移住は、城山町の野球にも影響を与えた。その一つは、彼ら建設業従事者の野球チームの結成と町の野球大会への参加、および、町の既存の野球チームへの加入である。彼らは、ダム工事の建設期間が数年に及ぶので、ある程度は「地域住民」として過ごしたのである。そして彼らが休日に娯楽として楽しんだのがやはり野球であった。その参加の形はすでに活動中の地域チームへ個々に加入するケースもあれば、職場の従業者同士でチームを作るケースもあったということである。

1970年代後半から城山町でもようやく大幅に人口が増加した。1975～80年の人口増加率は46.7%であり5年間で1.5倍弱の約1万5千人になった(表1)。その中でも15歳未満人口の増加率が54.2%、15～64歳人口のそれは44.2%と高い上昇を示した。城山町では、この時期、山林を切り開いた新たな分譲住宅地が完成して数百世帯の家族が流入した。それ以外にも農業人口の減少と農地の住宅用地への転用があって、城山町はこの時期、東京圏の郊外住宅地という性格を本格化させ始めたのである。こうした動向は、人口密度の高まりにも反映され(表1)、75年の561.0から80年の823.2への上昇をみるに至った。こうした人口の増加、特に若年人口の急増に対応して、城山町で初めての、そして唯一の県立高校が開校した。また、野球協会とは別に、少年野球協会が城山町において設立されたのもこの時期であった¹⁶。

そんな中、1975年、城山町に「ユニークな」チームが一つ創設された。当時50歳を過ぎていた大正生まれの数人が集まって野球をやろうということになったのである。今でこそ、高齢者の軟式野球は全国的に盛んになっているが、この時代はまだこうした年代の人たちが選手として軟式野球に参加することは少なかった。また、このチームの創設当初は、野球未経験者が多く、野球協会に登録して試合をするというよりは、練習を行なって技術の基本を学び、楽しむという姿勢だった。その後、このチームはメンバーが入れ替わって若い頃に野球経験のある人が多くなったが、40歳以上という入部資格は維持し、町唯一の中老年チームとして活動を続けた。(次節・事例3を参照)

1970年代半ばから80年代半ばにかけて、城山町では事業所数が増加し、75年の346から86年の711へと2倍以上の伸びをみた(表3)。その中でもサービス業、不動産業、卸売業・小売業・飲食店など第3次産業事業所は増加数、伸び率ともに著しかった。このような状況の下、ガソリンスタンド、新聞販売店、ボーリング場などの従業員がチームを作って町の野球協会に所属して大会に参加したこともあったが、いずれのチームも3年程度存続して消滅してしまった。しかしながら、上述のようにこの時期は郊外住宅地の発展、若年人口の増加、事業所数の増加などもあって、野球チーム・選手数ともに同町の

野球の歴史の中では最も多い時期であった。チーム数は、77年から83年まで19から21チームで推移し、登録選手数も78年の364人をピークとして300人以上を保持していた（表4）。このような軟式野球の活況があつて、そうした需要に応えるべく、1981年、軟式野球専用グラウンドが開設された。これによって、チーム間の練習や試合の場所取りをめぐる反目・争いが解消されただけでなく、少年野球協会との調整も容易になった。また、野球協会が大会を開催する際には、優先的に利用することができた。ただし、このグラウンドは町の中心部から少し離れた、城山湖の隣接地に造られていたので、交通の便はあまり良いとはいえなかった。

1980年代後半以降も城山町では人口総数は増加し続けたが、同時に、少子高齢化の傾向が明確化したのもこの時期である。こうした少子高齢化の傾向は、何も城山町特有のことではないが、城山町の場合、次のような人口の増減が見られた。15歳未満の年少人口は85年の5353人でピークを迎え（表1）、そうした状況に対応するため、翌86年には町立中学校が新たに創設され1校から2校に増やされた。その際、在校生は城山町内の居住地区によってどちらか別々の中学校へ通うことになったので、「離れ離れ」になることを惜しみ、将来、学生生活を終えた時には野球チームをつくろうと約束した生徒たちがいた。そして、実際、彼らは高校を卒業した時にチームを結成し、そのチームは2008年現在も活動を続けている（次節・事例2を参照）。

そんなこともあったのであるが、城山町の15歳未満の年少人口はその後、減少を続け、2005年には3176人にまで落ち込んだ（表1）。その結果、85年には人口の約28%を占めていた年少人口比率は95年約16%、2005年約14%と低下した。対照的に65才以上の高齢者人口は85年の1163人が95年2061人、2005年3544人へと増加し、総人口に占める比率は85年6.0%、95年9.1%、そして2005年15.4%へと上昇した（表1）。こうした傾向を多少なりとも反映しているからなのか、協会に登録している選手の平均年齢は上昇していった。利用可能な資料から判断する限りではあるが、1969年に26.8歳であったものが、徐々に上昇していき79年に31.2歳となり、30歳代を超えたのである（表4）。その後、資料が欠落しているので経過は不明であるが、1990年代半ばまでは33歳余であったが、2000年代には、平均年齢は36歳以上となり、40年弱で約9歳上昇したのである。これは、中高年になっても選手として野球を続けている人が増加したことが一因であり好ましいことと思われる反面、若者の参加が減少しているためとも推測され、解決すべき課題になっていると考えられる。

1980年代後半以降、事業所数の増加は鈍化し、86年から91年にかけて6%伸びて44増加したものの、それ以降は減少に転じて2001年には730となった。その中では、サービス業と卸売業・小売業・飲食店がいくらか増加したものの、建設業と製造業の減少が大きく作用したことにより、事業所総数としては減少という結果になった。脱産業化の進行に加

表4 城山町野球協会チーム数・選手数の推移

年	チーム数	地域クラブ 型チーム数	企業型 チーム数	選手数	選手平均 年齢	城山町軟式野球関連の出来事
64	13					城山町野球協会創立
65	17					
66	16					会則施行
67	16					
68	14					春夏秋3季トーナメント制実施
69	12	5	7	203	26.8	
70	10	4	6	177	27.8	
71	11	5	6	192	28.5	
72	8	4	4	144	29.5	
73	10	4	6	202	29.8	
74	13	4	9	262	29.7	
75	15	5	10	278	29.9	春夏秋3季トーナメント制終了。町少年野球協会設立
76	17	6	11	299	29.7	会則改正
77	20	7	13	360	29.8	
78	21	8	13	364	29.8	15周年記念事業実施。会長交代
79	20	9	11	318	31.2	
80	19	9	10	322	32.8	
81	19	9	10	319	33.5	町民の森野球場開設
82	21	9	12			
83	21	8	13	343	33.4	
84	16					城山町野球協会会長交代
85	19					
86	17					
87	17					
88						町体育協会設立
89	17					第1回津久井郡野球連盟大会開催
90	19					津久井郡野球連盟設立。
91	20					会則改正
92	19					
93	18	12	6	302	33.1	
94	16					会則改正。第1回津久井郡野球連盟壮年大会開催
95	16	11	5	282	33.9	会則改正
96	16					
97	14					
98	13					
99	17					
00	16					会則改正
01	15	12	3	278	36.5	
02	15	12	3	278	36.6	
03	15					
04	16	12	4			
05	16	12	4	301		会則改正
06	15	11	4	278	37.5	
07	14	11	3	269		城山町野球協会解散する

* 1968年以前チーム数は『城山町野球協会設立十五周年記念誌』（1978）による。84～89年は城山町広報紙に記載された春季・秋季大会参加チーム数。それ以外は、協会保管資料による。チーム型別内訳・選手数・選手平均年齢の空欄は、資料が協会に残存していないため。選手平均年齢は資料をもとに筆者が計算した。

えて製造業事業所の東京圏から圏外への移転があって、さらにはバブル崩壊後の不況の長期化は、製造業事業所を母体とする野球チームが減少する要因となった。城山町野球協会所属チームのうち、「企業型」チームは80年代前半まで常に半数かそれ以上を占めていたが、90年代以降には、こうした要因があって、半数どころか3分の1かそれ以下でしかなかったのである（表4）。また、バブル崩壊後の長期不況は、軟式野球競技人口の減少ないし停滞の要因の一つになった。失業率も神奈川県内の他の市町同様に上昇し、バブルの真っ只中の1990年には2.6%で神奈川県全体の平均（3.0%）より下回っていたのが、1995年4.2%、2000年4.1%と推移し、2005年には6.3%に上昇し県平均（5.5%）を上回った¹⁷。そうした状況の下、「地域クラブ型」チームで活動してきた住民の中にも経済的に野球をやる余裕がなくなりやめていった人もみられた。

1990年、城山町野球協会は津久井郡の他の3町の野球協会とともに、津久井郡野球連盟を設立した。同連盟は神奈川県軟式野球連盟の津久井支部としての役割を担うことになり、各種の県大会に津久井郡の代表チームを派遣した。各町の野球協会とは別に春秋2回の野球大会を開催し、そこで好成績のチームを県大会に出場する代表チームとした¹⁸。しかし、より重要なことは、このことによって各チームがより多くの試合機会をもつことができるようになったことであり、また、軟式野球に関わる個々人（選手だけでなく）がより多くの他者と交流し、その社会関係を形成したり発展・継続する機会を得られるたりするようになったことである。

2000年代に入って、城山町の軟式野球に最も大きな影響を与えたのは市町村合併である。上述のように、2007年3月、城山町は相模原市に編入合併した¹⁹。それにともなって、城山町野球協会は同年12月に解散し、1964年の設立以来43年の歴史に幕を下ろした。13チームでスタートした城山町の軟式野球は、20チームを超える時期もあったが、結局1つ多いだけの14チームで終えることになった（表4）。

今後、どのような枠組みで野球を続けるかは各チームで判断することになり、相模原市の野球協会に新規加入するか、前述の津久井郡野球連盟を引き継いだ形の「津久井軟式野球リーグ」に参加するかを選択することになった（一応、両方参加しても構わないことになっている）。いずれにせよ、今後もこの地域において、地域スポーツとしての軟式野球が行なわれていくことは変わらないであろうが、城山町の住民にとって40年以上続いた軟式野球を地域スポーツとして行なうための枠組みが変更を余儀なくされたことは確かであろう。

4. 社会関係の形成と継続・発展

本節では、軟式野球を通じての社会関係の形成契機と、さらにその後の継続・発展の事例を検討する。第1に、既存のチームに個人が新規に加入するケースである。

事例1

津田さんは、46歳で、城山町に妻と子供と暮らしている。野球経験は豊富で、少年野球から始めて、高校時代には硬式野球部で活動したこともある。卒業後、同級生数人といっしょに野球チームをつくった。その当時は町田市に住んでいたが、他の人たちは多摩市に住んでいたため、そのチームは多摩市で活動することになった。それとは別に、就職した会社の野球チームにも入部した。その後、転職、結婚、そして現住地、城山町への転居などがあって、会社のチームは退部し、同級生のチームには「人数が足りない時」呼ばれて都合が合えば参加する程度になった。

そんな折、新たな野球チームに参加することになった。城山町では年1回、自治会対抗ソフトボール大会があり、数年前、津田さんもそれに初めて参加した。その時、「気軽に声をかけてくれた」のが、城山町で現在所属している野球チーム監督の落合さんと江成さんであった。大会後の飲み会は、数日経ってからあらためて行われたせいなのか、「何かよそよそしい雰囲気」を感じた。自治会の行事とはいえ、一緒にスポーツで汗を流したのに、少し時間が経っただけで、そんなことはあたかもなかったかのような態度をとられ、一人浮いた感じで孤独な気持ちでいたが、この時も落合さんと江成さんが話しかけてくれた。その際、いちばん盛り上がった話題は近隣のことやソフトボールのことではなく、軟式野球についてであった。そして、その場で落合さんたちが城山町で所属するチームに参加するよう誘われ、すぐに快諾した。その年の秋の城山町大会から選手登録をしてチームのメンバーになった。その後も城山町の大会と津久井郡の大会には必ず参加し、チームにとって欠かせない一員としてチームメイトみんなから認知された。

このチームは、城山町野球協会に登録していたチームの中でも最も古くから活動しているチームの一つである。すでに1960年代に結成され、その長い存続期間には様々な人が入部し、その中には退部した人もいるが、ずっと続けている人もいる。その結果、チーム設立当初から活動している人はすでに還暦を過ぎていて、高校や大学を卒業してから入部したばかりの若者たちとは親子どころか、祖父と孫ほどの年齢差があったりする。七十代から二十代まで幅広い年代の人たちがチームメイトとして所属し、いっしょに練習し、時には試合で共にプレイすることもある。入部して丸3年が経過し、落合さん、江成さん以外のチームメイトとも試合や練習の場では冗談を言い合ったり、互いに励ましたり慰めたり、そういうことが積み重なって親密な関係になった。特に、試合にぎりぎりの9人しか集まらなかった時には、来た者同士で、普段より連帯感も高まり、仲間としての絆が強まると

いうこともあった。

しかし、その後は、落合さん、江成さんとも自治会の集まりでしか顔をあわせないでいる。チームメイトの中には、城山町において商売を営んでいる人もいて、その顧客になっている人もいる。元々、このチームは創設者の一人がクリーニング店を営んでいて、チーム名はその店の屋号から取られているのである。他にも写真店の経営者や、飲食店の息子がいて、特に、後者の店には時々ではあるが試合の後にメンバー全員で食事に行ったりする。しかし、野球を離れた場面では、これまでのところ交流はないままでいる。

とはいえ、年に何回か開かれる飲み会では、上述の自治会ソフトボール大会後の打ち上げの飲み会と違って、メンバーの誰とでも気軽に話すことができた。ここから、野球という社会的文脈を離れての交際に発展することはないものの、こうしたチームとしての飲み会への参加は、チームメイトとの相互理解、そして親交を促進する機能があると考えられる。

次に、チームメイトの大部分または全員とすでに知り合っていて、新たにチームを結成するケースである。

事例2

増岡さんは37歳で独身、現在は神奈川県内でサラリーマンとして勤務している。軟式野球とは長い付き合いになる。少年野球から始め、中断することなく今日に至り、野球暦は30年近くに及んでいる。つまり、人生の大部分、野球を始める前の幼少期を除けば、野球をやり続けてきたことになる。そのほとんどは城山町での活動である。城山町の少年野球チームで軟式野球の経歴をスタートさせ、中学・高校時代は、地元の学校の野球部に所属し、そして卒業後、現在も活動しているチームを中学の同級生と結成した。中学3年生の時、その中学校の何割かの生徒が新設の中学校へ移ることになった。その時に、「高校を卒業したらまた一緒に遊ぼう、一緒に野球をやろう」と約束したことがきっかけだった。チームをつくってすぐ、城山町野球協会に登録し、すぐに、同協会や津久井郡軟式野球連盟主催の公式試合に出場した。試合のない時は、練習をしたり、他チームと練習試合を行ったりした。そして、その後は必ず「みんなで」飲みに行った。結成時のメンバーは、元々同級生であり、友人同士であり、野球を契機として親密になったわけではない。しかし、一般的に、高校卒業後の数年は、就職や進学とそれともなう転居などで離れ離れになり、なかなか友人としていっしょに過ごす時間がなくなるようなライフコース上の出来事が多いので、こうしていっしょに野球をやることは友人関係を継続させることに寄与したといえるであろう。

このチームのように、高校卒業を機に同級生が集まってチームをつくることはめずらしくないそうであるが、その後の就職・進学、転居、さらには転勤、結婚などによって参加できなくなるメンバーがいて、チームは存続の危機に直面し、ついには解散してしまうケー

スもあるという。しかし、増岡さんのチームは、同じ小学校区に住む後輩たちが何人か連れ立って入部してきたので、先のような理由でやむなく休退部したメンバーの補充ができ、チームは存続することができた。新入部のメンバーとは顔と名前ぐらいは知っていても、実際に会って話すのは初めてであった。当初、チームメイトとの同僚関係、および、先輩・後輩の関係でしかなかったが、程なく親密になり仲間同士の間柄になった。しかし、その後、上記のような頻繁な接触機会があって、さらに、シーズンオフの12～2月でも、時間がある時は、城山町内で飲みに行ったりして互いに親交を深めた。

しかし、元々友人関係にある元・同級生たちとも、新規加入のチームメイトたちとも、親密な関係を構築し、継続・発展させる最大の機会は、野球以外の何かイベントごとを行うより、試合で勝利し、特に、大会で優勝することだと増岡さんは考えている。それと同時に、毎週のように集まって練習なり試合なりをチームメイトと一緒にやることが「同窓会が毎週って感じ」で楽しいので、チーム設立の頃から、ほぼ毎週練習か試合をやっていた。このことは単に技術や体力のレベルアップにつながっただけでなく、メンバー間の関係の深化にもつながった。そして、その後、何度か城山町の大会や津久井郡の大会で優勝を経験し、喜びや感動をチームメイトと分かち合ったことは、他の何ものにもかえられぬ事であり、彼らとの絆を強めたと思えた瞬間でもあった。

次に、元々、幼なじみだったが、転出していた一方が地元に戻ってもう一方のチームに入り、友人としてのみならず、親友の関係へ発展したケースである。

事例3

原さんは、71歳で、現在は妻と2人暮らしをしている。原さんは、戦時中、横浜から城山町へ家族とともに疎開してきた。そこで知り合ったのが3歳年下の柳生さんだった。最初は、「地元っ子」と転校生ということでなかなか打ち解けなかったが、同じ少年野球チームに入って野球をやるうちに、家が近所ということもあって、年齢は3歳違っていたものの、仲良くなった。その後、幼なじみであることに変わりはないが、しばらくは別々に野球をやっていた。高校を卒業後、それぞれ勤務先の会社の軟式野球部で活動していた。また、原さんが他の市に転居したこともあっていっしょに野球をやらない時期が続いた。一方、柳生さんは城山町に住み続けていて、会社の軟式野球部とは別に、地元でつくった野球チームでも中心メンバーとして活動していた。こうして別々の野球人生を歩んでいたが、原さんが34歳の時、城山町に、しかも柳生さんの近所に転居してきたことで、二人は親交を再開することになった。それは、柳生さんがプレイしていた地元の野球チームにおいてであった。当時はまだ、原さんは勤務先の野球部で監督をしていたが、城山町では、選手として野球をできるので、投げて、打って、走って、大いに野球を満喫できた。

そんな中、原さんが40歳の時、野球人生における一つの転機が訪れた。それは、1976年、前節で既述の大正生まれの野球初心者が集まったチームのコーチを頼まれて引き受け

たことである。当初はコーチだけだったが、やがて原さんも選手としてプレイするようになり、さらに、メンバー構成が初心者から経験者に入れ替わっていく中で、柳生さんもこのチームに加わった。このチームの目標は城山町の大会より、年1度開催される「寿野球」に置かれていた。「寿野球」は、長野県千曲市で5月の連休後の日曜日に開催される全国大会で、40歳以上ということに加えて、試合に出場している選手9人の年齢の合計が450歳以上、すなわち、平均50歳という規定で行なわれる中高年向けの大会である。ここでも二人は協力して、40才以上のメンバーを集めて出場し、しかも、1990年には優勝を果たし、神奈川県の新報にその記事が掲載されることもあった。

このチームは数年前「世代交代」をして、原さんも柳生さんもチームを去ることになった。とはいえ、野球をやめたわけではない。二人とも既に60歳の還暦を過ぎているのであるが、まだいっしょに野球をやっている。「還暦野球」という60歳以上限定の軟式野球で、仕事を退職したので、時間があるためか、若い時よりもっと野球に時間を費やしている。真冬のシーズンオフの時期を除けば、ほとんど毎週2回、試合か練習をしている。そして飲んでいる。この「還暦野球」のチームは城山町のチームではないが、それだけに違った地域に住むメンバーと仲間関係を新たに構築することになった。

二人は、元々、幼なじみで、原さんの転居後は近隣関係となり、さらに、お互いに家族ぐるみの付き合いをしていて親密な間柄であった。そのうえで、野球のチームメイトとして活動することは友人関係を継続することに寄与したばかりでなく、さらにそれを強化し発展させた。今や二人は自他共に認める親友関係にある。メールのやり取りこそしないが、近所に住んでいるので、何かあれば直接互いの家に行って用事を済ましてしまう。2007年の秋、柳生さんの母親が亡くなった時、原さんが葬儀の手伝いを先頭に立ってやるということもあった。

こうして、二人は生涯、野球をやり、特に、地域で行なわれていた野球を通じて幼なじみになり、一度は別々に野球をやる時期もあったが、地域での野球を共にやることで友人関係が継続され、親友関係に発展したのである。

次に、地域の競技団体役員として活動し、チーム外に仲間関係が広がったケースである。
事例4

勝部さんは73歳で、現在は子ども2人と暮らしている。長年勤務していた会社を定年退職してから既に10年以上経つが、今も家にこもることなく積極的に活動している。野球以外にも高齢者への給食ボランティアの活動を行なっていて、ほぼ毎日外出し地域の人たちと交流、交際している。しかし、家族・親族以外で深い付き合いをしているのは、所属する野球チームのメンバーが多い。チームの中で最年長であり、チームメイトは全員年下であるばかりか、二十歳過ぎの孫と言ってもいいような選手もいる。さすがに、これほどまでに年齢が違う選手とは野球という社会的文脈を離れて付き合うことはない。ただ、そ

のうちの一人は実家が飲食店を経営していたので、練習や試合の後、昼食を食べに参加したチームメイト全員で行くことがしばしばであった。一方、入部して20年以上経った40代の一人とはヴォランティア活動のために、パソコンでの資料づくりを手伝ってもらうなど、軟式野球とは離れた分野での交流がある。

しかし、勝部さんの軟式野球での主要な活動は、城山町野球協会の役員としてのそれであった。1964年の設立に関わり、役員として活動し、そして1984年、第3代の会長に就いて以来、2007年の解散までこの役職に従事した。このことによって、勝部さんは所属チームのチームメイトだけでなく、他チームの人とも交流することになった。城山町野球協会では、所属チームから1人以上の代表者が理事として出席する理事会を年に3、4回開いていた。理事会は、大概、金曜日の夜に開催され、翌日が週末の休みということもあり、終了後、懇親の目的で飲み会を行なうが通例であった。このような機会は、異なるチームに所属していながら互いに親密になり仲間関係となることを可能にするものであった。

また、この数年は、津久井郡軟式野球連盟の役員も兼務することによって、津久井郡内の他町野球協会の役員の人たちとも交流ができたのみならず、相模原市との合併後の軟式野球のあり方について、彼らと共に連盟としての考えをまとめたり、それをもって相模原市軟式野球協会と交渉したりした。こうした状況は、平穏な運営が続いていた時より、役員同士、困難な経験を共有することになったので、その分、仲間意識や連帯感は強まったかもしれないと思っている。

最後に、選手としてではなく審判員として、他の審判員と仲間関係を形成したケースである。

事例5

工藤さんは1947年生まれで、いわゆる「団塊の世代」である。地方から就職のため上京し、以来、城山町に住み、職業生活を送り、1年前に定年を迎えた。その間、約40年にわたって城山町での軟式野球に関わるようになった契機は、たまたま最初に住んだ地域に野球好きで古くから野球チームをつくり、練習をよくやった人が近所にいて、その人に誘われたことであった。就職前は少年野球も学生野球も経験がなかったが、練習をよく行なうチームだったので、それに積極的に参加することで上達していった。チームメイトとも仲間関係を構築していたが、41歳になった1988年、審判員の資格を取得した。やがて、チームのメンバーが次第に若返っていき、同年代のメンバーで「年齢を理由に」やめていく人もでてきた。そこで、工藤さんも公式戦のメンバー登録から外れて、審判員に専念することになった。城山町の野球協会の場合、審判部があり、そこに所属することになる。資料がある最も新しい年である2006年、審判部に所属する人の年齢は20歳代が一人もいなくて、30歳代2人、40歳代5人、50歳代12人、60歳代12人、70歳代1人で、平均年齢は56.7歳であった。これは同年の選手の平均年齢37.5歳より約20歳も高かった。

城山町や津久井郡の大会では、朝8時頃に集まって午後3、4時頃まで数試合行なうことが多い。あらかじめ決められた試合で主審か塁審を担当し、担当がない時は、スコアをつけたり試合時間を計るストップウォッチをチェックしたりと、何らかの仕事をしながらバックアップとして待機する。試合後には必ずミーティングを行なう。試合の中で起こった微妙な判定や疑問に思ったこと、あるいは、反省点などがあれば、審判員同士で話し合うのである。試合が終わったすぐその場で、問題点を共有していっしょに考えたり、アドバイスをしたり受けたり、また、情報を伝えたりなどさまざまなことを行なうのである。

こうして、一日のかなり長い時間、行動を共にするのであるが、野球チームは7回制の場合、試合時間が長くてもせいぜい2時間程度である。しかし、早朝から夕方近くまで活動する審判員たちは選手たちよりはるかに長い時間を会場で一緒に過ごすことになる。さらに、試合を円滑に進行するために互いに協力し合うのであるから、審判員同士で仲間関係が形成され、また、継続することによって、その関係は深まっていくことは十分ありえることであろう。

審判員の仲間の中には同じ趣味の人がいて、年に1、2回だが、ゴルフを一緒にやっている。そのような軟式野球とは別の社会的文脈での付き合いに広がったケースもある。

野球を通して仲間関係を形成するのは、選手間だけでなく、こうした審判員の間でも見出されるのである。

5. 結語

以上、地域スポーツとしての軟式野球について、その活動舞台である地域の社会構造と、そこでの軟式野球の発展過程を検討し、さらに、活動主体である地域住民の社会関係が形成、発展、継続する要因と過程について5つの事例を見てきた。そこから得られた知見を整理することで本稿の結語としたい。

本研究の対象地域である神奈川県旧・津久井郡城山町（現・相模原市城山町）は、1955年、「昭和の大合併」で誕生し、2007年3月、「平成の大合併」で隣接する相模原市に編入合併し、その四十年余の歴史の幕を閉じた。その間、城山町は製造業が大きく発展することなく、東京圏の周縁部に位置する郊外住宅地として発展してきた。そのため、軟式野球には「企業型」チームが少なく、「地域クラブ型」チームが中心となってこの地域の大会を盛り上げ、野球協会を運営してきた。

城山町では、2007年の野球協会解散時に参加していたチームは比較的存続期間が長いチームが多く、1、2チームを除いて15年以上活動を続けていた。そんな既存のチームに

個人が新規に加入するケースでは、チームメイトたちは、紹介者を除けば、初めて会う人ばかりであったが、何度か試合や練習を繰り返すうちに、仲間関係を構築できた。このような、野球の試合や練習におけるある程度継続的な相互作用があって初めて連帯感や一体感をもつことができ、チームの目標を共有していることを互いに確認できるのであって、仲間関係も構築されるものと考えられる。だからこそ、事例1にみられた年に1度のイベントへの参加だけでは、しょせん一時的な関係に留まるのであろう。また、忘年会や打ち上げなどの飲み会は仲間や友人の間の親密性を強化し促進する効果はあるのかもしれないが、それは、あくまでも野球そのものでの関係形成があったうえでのことであろうと考えられる。

しかしながら、同じチームでいっしょに活動して仲間関係を構築したとしても、それが友人関係の形成へ発展するとは限らない。事例2でみられたように、野球のオフシーズンに飲みに行ったり遊びに行ったりするケースもあれば、事例1のように、全然付き合いがないケースもある。両者の違いが個人の属性によるものなのか、ライフコース上の位置の違いによるものなのか、あるいは、所属している年数なのかは明確ではない。しかし、当事者同士の野球という社会的文脈を超えて交流しようという意志が友人関係の構築には必要なことであろうと考えられる。

友人関係については、軟式野球に参加し活動することは、その関係の継続・発展に寄与するものと考えられる。先行研究においても、「都市の男性高齢者の場合」ではあるが、「趣味」は「関係の継続の契機としての機能を強くもっている」ことが示されている²⁰。事例2では、インフォーマントが中学時代の同級生たちと一緒に高校卒業後集まって野球チームをつくったもので、以前から友人関係にあったのであるが、軟式野球を一緒に行なうことによって、それも毎週のように集まって練習か試合を行なうことによって、親密な結びつきが一層強まったということを述べている。さらに、事例3では、軟式野球を共に行なうことが、友人関係を継続・発展させただけでなく、互いに親友と認め合うほど結びつきを強めたケースを示している。野球のチームメイトになる以前に、幼なじみであり、家族ぐるみでの近所づきあいがあり、年齢は3歳違うものの、友人関係を構築していたが、常に、特に30歳代以降、一緒に軟式野球をやってきたことがそうした親密な関係をさらに発展させたと考えられる。

集団スポーツにおける他者との関係形成については、チーム内の関係だけに関心を寄せがちであるが、本研究ではチーム間の境界を越えた交流と関係形成にも目を向けてみた。事例4では、チームの代表者として、地域の競技団体である城山町野球協会の会合に出席し、さらに同協会の役員となって他チームの代表者と、また、事例5では、チームを離れて審判員として活動し、他の審判員の人と、それぞれ交流し社会関係を形成しているケースを見た。前者においては、地域の軟式野球についてさまざまな問題を他の役員と共に話

し合い考え、意見を集約したり協力して行動に移したりする過程を経て相互の理解が進み進行が深まっていった。後者においては、審判員同士はチームメイトということではないが、試合を円滑に進行するという共通の目的を達成するために協力するのであり、そのために技術的なアドバイスをしたり情報を提供したりすることも相俟って、同じ審判員仲間としての意識が高まっていったものと考えられる。

本研究では、個人が地域スポーツとしての軟式野球を通してとり結ぶ社会関係について、仲間関係と友人関係とに類別して分析を行なってきた。軟式野球は、「幅広スポーツ」、そして地域スポーツとしてクラブチーム数や競技人口が多く、また、その歴史が長いにもかかわらず、これまで、軟式野球に関する社会学的研究はあまり積み重ねられてきたとは言い難いように思われる²¹。そのような状況の中、本研究で得られた知見は限定的なものではあるが、今後、それがこの領域で積み重ねていく研究の手がかりを提供するという意味があるならば、一つの礎になるかもしれない。よって、たとえば、高齢化社会の到来・進行によってますます重要性を帯びるであろう高齢者の軟式野球、あるいは、本稿で対象とした相模原市旧・津久井郡地域のように、市町村合併によって大きな影響を受け、なお過渡期にある地域における軟式野球などについて分析し、考察を深めていくことを今後の課題としたい。

注

- 1 頂点スポーツとは、「オリンピックやワールドカップで好成績を挙げられるよう」な競技レベルの高いスポーツを意味する（倉沢、2001）。チャンピオンシップ・スポーツも同義。野球では、硬式野球のプロ野球やMLBやそれらを目指す学生野球（東京六大学野球や高校野球など）や、社会人野球などが該当する。
- 2 倉沢、2001、p.70
- 3 佐伯、1988、p.18
- 4 倉沢、2001、p.74
- 5 浅川、2003、p.109
- 6 功力、1969、pp.40-107
- 7 全日本軟式野球連盟（編）、1976、pp.11-14
- 8 郡市区町村という行政単位を活動範囲としているのは、（財）全日本軟式野球連盟に属する野球協会（連盟）の場合であって、軟式野球の運営団体には、関東団地野球連盟のような郡市区町村の枠組みではなく、各地の団地の野球チームが集まって組織されているケースもある。
- 9 松本、1992、p.149
- 10 Allan,G.、1989、邦訳（1993）、p.24
- 11 Ibid., pp.36-44
- 12 Ibid., p.42
- 13 東京圏は、東京、神奈川、埼玉、千葉の各都県に茨城県の南部を加えた1都4県を範囲とし、「平成

- の大合併」以前の境界で333の市区町村を含んでいる。元々は、東京都市圏交通計画協議会による「東京都市圏パーソントリップ調査」（1988年）の対象範囲であるが、都市社会学における社会地図研究でもこれを対象範囲としているが、それはこれらの範囲が「東京都市圏に居住する人々の日常生活の空間的な広がりを示している」と判断したからである（倉沢・浅川、2004、p.6）。
- 14 残存している城山町野球協会の記録文書には、1969～71年に神奈川県企業庁津久井発電所、80、81、83年に神奈川県企業庁城山発電所、69～72年に「県水」、77年に谷ヶ原浄水場というチーム名が記録されている。
 - 15 『津久井教育のあゆみ』編集委員会、2001、p.237
 - 16 前掲書、p.237
 - 17 データ出所：国勢調査1990、95、2000、05年
 - 18 津久井郡野球連盟の残存する記録文書や元役員の人たちへのインタビューから。
 - 19 神奈川県津久井郡城山町、2007、p.2、p.15
 - 20 矢部拓也、西村昌記、浅川達人、安藤孝敏、古谷野亘、2002、p.324
 - 21 社会学分野での軟式野球の既存研究としては、中島（1972）、中島・川西・鈴木（1983）、小久保（1996）、小林（1997）、阿江（1999）がある。

参考文献

- 阿江美恵子、「集団としての大学女子軟式野球チーム—競技開始動機及び集団凝集性について—」、『東京女子体育大学紀要』、34：59-69（1999）
- Allan, Graham : Friendship ; Developing A Sociological Perspective, Harvester-Wheatsheaf, Hemel Hempstead (1989). 仲村祥一、細辻恵子（訳）、『友情の社会学』、世界思想社、東京（1993）
- 浅川達人、「高齢期の人間関係」、古谷野亘・安藤孝敏（編）、『新社会老年学—シニアライフのゆくえ—』、pp.109-139、ワールドプランニング、東京（2003）
- 神奈川県津久井郡城山町（編）、『城山町閉町記念誌 我がふるさと城山 思い出を胸にはばたく』、神奈川（2007）
- 功力靖雄、『明治野球史』、逍遙書院、東京（1969）
- 小林秀和、「社会人軟式野球の組織構造と運営—社会人硬式野球及び軟式野球の比較—」、『愛知学院大学教養部紀要』、45（1）：135-150（1997）
- 小久保信幸、「コミュニティ・スポーツの変容と小地域再編：茨城県水戸市飯富町塙集落の事例を中心に」、『体育学研究』、40（5）：277-290（1996）
- 倉沢進、「地域社会とスポーツ」、渡邊融（編）、『現代社会とスポーツ』、pp.70-82 放送大学教育振興会、東京（2001）
- 倉沢進、浅川達人、（編著）、『新編 東京圏の社会地図1975 - 90』、東京大学出版会、東京（2004）
- 松本康、「新しいアーバンイズム理論」、鈴木広（編著）、『現代都市を解説する』、pp.133-157、ミネルヴァ書房、東京（1992）
- 中島豊雄、「地域スポーツ集団の社会学的研究—軟式野球チームの存続と崩壊—」、『名古屋大学教養学部紀要（自然科学・心理学・保健体育学）』、16：59-84（1972）
- 中島豊雄、川西正志、鈴木文明、「地域社会におけるスポーツクラブの社会的機能—コミュニティ活動とコミュニティ意識を中心として—」、『体育学研究』、6（1）：43-155（1983）

佐伯聰夫、「スポーツの社会学的理解—スポーツをどのようにとらえ、考えるか」、森川貞夫・佐伯聰夫（編）、『スポーツ社会学講義』、pp.10-19、大修館書店、東京（1988）

『津久井教育のあゆみ』編集委員会、『津久井教育のあゆみ』第5集、神奈川（2001）

矢部拓也、西村昌記、浅川達人、安藤孝敏、古谷野亘、2002、「都市男性高齢者における社会関係の形成—「知り合ったきっかけ」と「その後の経過」—」、『老年社会科学』24（3）、pp.319-326

全日本軟式野球連盟（編）、『軟式野球史』、ベースボール・マガジン社、東京（1976）